



連載

ビブリオ・トーク  
—私のオズメー—

… 渡辺博芳 (帝京大学)

## 教育とは何か

大田 堯 著

岩波新書 (1990), 222p., 780 円+税, ISBN : 978-4004301059



「教育とは何か」と問われたら、どう答えるだろうか。もちろん、これは簡単に答えられる問いではないし、答えを述べてさっと片付けてしまうような問いでもない。自分自身に問い続け、時にその答えを考えながら教育や研究の活動を継続していくのだと思う。

随分前に、本会のコンピュータと教育研究会が対象とする研究分野に関心を持ち、教育を研究テーマとするにあたって、教育に関する書籍を何冊か読み漁った。そのときに出会ったのが本書であり、その後、教育について考える上での拠りどころとなっている。

著者の大田先生はこれ以前に『教育とは何かを問いつづけて』という書籍を著されており、本書の「はじめに」において、その後の議論から「教育というものを何よりも人間という動物種の育児行動、種の持続のための営みとしてとらえ直すところから出発するほかあまい」と考えさせられたと述べている。そんなところから考えるのかと驚いたが、読み進めるうちになるほどと思わされた。

本書は四万十川の夕暮の描写から始まり、生きものたちの連鎖から、さまざまな生きものたちがどのように種の持続を営んでいるかをレビューする。分裂することで増殖する単細胞生物では個体の死がそのまま種の更新と継続と捉えられたり、魚類の中にはサケのように多数の産卵を終えた後、生命を終えるものがあつたりと、種の持続のために自らの生命の持続を犠牲にする姿がある。鳥類では生まれたヒナたちに親鳥が食糧を運ぶという育児行動が巣立ちまで行われたり、哺乳類では親の保護のもとにあるうちに餌のとり方など、ひとり立ちに備えた技術を学ぶものがあつたりする。

人間の場合はどうか。地域によって異なるが、日本では、子どもが生まれると、3日目には湯あみや袖とおし、7日目にお七夜、30日前後に初宮参り、100日頃にお食い初め、1年目の誕生祝には一升餅を背負わ

せたりと、節目節目に行事がある。出産にかかわるリスクが大きく、社会的・経済的、あるいは健康上の理由から子育てが困難であったところに、人々は何度も集まり、危機であり発達の節目でもある時期に行事を持っていたのだという。やがて七五三を経ると、家族中心の子育て行事から共同体での集団活動へと移行する。15歳頃までは「子ども仲間」、15歳を過ぎると「若者衆」に入り、祭りなどの年中行事に参加し、責任を分担する。そうして社会的行動能力を身に付けていく。若者衆は、火災や洪水などの直面する危機から共同体を防衛する戦闘集団という意義もあつたようだ。これは、農耕社会の例であるが、本書の丁寧な描写により、農耕社会で「一人前」になるための教育システムがしっかりと存在していたことを実感する。

大田先生は一人前であることを「自分で自分を導くことができること、自立をしながら、それを前提として参加し、かつ依存する、いわばそれぞれの間が持ち味の違いを前提にしながら、ある社会的部署に出番を持つ能力を発達させる、それがおそらく、いまでも昔も変わることのない一人前たることの要件なのでしょう」と述べている。狩猟社会、農耕社会、工業社会、情報社会に続く新たな社会として Society 5.0 が提唱されているが、どのような社会になったとしても、このような意味での「一人前」になれることが基本にあると思う。

以上は、人間という種の持続のための教育としての観点であるが、本書ではほかにも、文化としての教育、人権としての教育といった切り口で議論がなされており、いくつかの観点から教育を考える上での示唆を与えてくれる。

(2020年5月18日受付)

渡辺 博芳 (正会員) hiro@ics.teikyo-u.ac.jp

1988年 宇都宮大学大学院修了。栃木県庁を経て1991年 帝京大学理工学部・助手、現在、同教授。博士(工学)。本会シニア会員。教育学・情報教育に関する研究に従事。